

## 対話型アセスメント DLA をどのように日本語指導にいかしたか

### —小学校での JSL カリキュラムづくりへの取り組み—

中野 裕美子 (墨田区教育委員会)

#### 1. 実践の現場

本実践の現場である墨田区立錦糸小学校は、在籍 220 名中約 50 名の児童が日本語教室での指導を受けている。日本語教室では、小学校教諭の日本語加配教員(以下:日本語教員) 2 名とすみだ国際学習センターの日本語指導員および支援員(以下:支援員) 4 名で指導に携わっている。日本語教員は主に JSL 教科指導を行い、支援員はサバイバル日本語や日本語基礎を担当している。日本語指導員である私は、児童の日本語の実態把握、指導の計画や内容の提案、実際の指導を行っている。

#### 2. 対話型アセスメント DLA

日本語指導において、背景の異なる外国人児童生徒の具体的な言語能力のイメージが共有されにくい等の課題から、DLA は開発された。アセスメントを通して、子どもたちの言語能力を把握すると同時に、どのような学習支援が必要であるか、教科学習支援のあり方を検討することがめざされている。「導入会話・語彙力チェック」「話す」「読む」「書く」「聴く」のテストで構成され、どのテストを実施するかは児童の日本語能力に応じて、実施者が決める。

#### 3. DLA の実施から日本語指導へ

##### 3.1 対象と結果

本実践の対象は、来日後 1 年以上が経過する 3 年生 7 名である。DLA の「導入会話・語彙力チェック」「話す」「書く」テストを年度はじめに、「読む」テストを年度途中に行った。

その結果、全体的に「話す」力と「読む・書く」力に大きな差があること、個々の「書く」課題が明確になった。

#### 3.2 DLA の結果から

実施した 3 種類のテストの結果を以下に示す。なお、評価基準は、「5:とてもよい、3:ふつう、1:もう少し」で、テストを実施した担当者同士で話し合い、客観性のある評価を目指した。

児童	話す	書く	読む	グループ
A	4.6	2.4	2.8 (B)	○
B	2.0	1.1	2.6 (C2)	○
C	3.3	3.0	2.3 (B)	○
D	3.5	2.6	3.0 (B)	●
E	1.7		2.6 (C1)	○
F	3.8	1.7	2.5 (C2)	●
G	3.8	2.2	2.6 (C2)	●

<4月・9月実施 DLA 結果>

JSL 国語科指導を進めるにあたり、DLA の結果と児童の関係性などを考慮し、7 名を 2 つのグループに分けた。どちらのグループも教科学習につながる読み書きの力を伸ばすことを大目標とした。

#### 4. 具体的な実践

##### 4.1 JSL 国語科指導

JSL 国語科指導の具体的な内容と児童の学びの様子を抜粋して示す。指導は基本的に日本語教員と私の 2 人体制で進めた。

##### [実践①]

ねらい	・助詞、文字の表記に注目して短文を読む。 ・考えたことをもとに短い文を書く。
具体的な手立て	スリーヒントなぞなぞ作り、4 コマお話作り、2 年生で学んだ漢字を使って文を書く。語意を視覚的補助や口頭説明を通して確認する。
教材	「文字のまちがいさがし」「2 年生で学んだ漢字」他

実践①では、教科学習につながる読み書き

のスキルがスモールステップで身に付くようにとの意図で行われた。短文を読む場面では、語意がわかる児童が、わからない児童に説明する機会を設けることや、画像やイラストなどの視覚的補助を利用することで文の内容理解を促した。考えたことを書く場面では、清濁音の区別、活用の表記、文のねじれなど、DLAで明確になった課題に応じて、個別のやりとりを通して支援した。

[実践②]

ねらい	・詩を読む。・書きたい内容の詩を書く。 ・詩と文の違いがわかる。
具体的な手立て	詩中の語意を体験や視覚的補助を通して確認、詩と文の違いを読み取る。自分の書きたい内容で詩を書く。
教材	「はっとしたことを詩に書こう」

実践②では、詩と詩の内容を文章にしたものを比較して読み、違いについて考えた。「詩は短く言う」「(詩には主語の) ぼくがない」「てんやまる(句読点)がない」などの意見が出た。詩中にある擬音語や擬態語は、実際に様子を見せたり体験させたりすることで、児童が意味をつかめるように工夫された。書きたい内容で詩を書く時間には、読んだ詩を参考にしてアレンジして書いたり、事前に書きたい内容を考えて詩にしたりすることができた。詩中で文字表記の課題が顕著に表れ伝えたいことが伝わりづらい詩や、詩ではなく文になっていたものもあった。

[実践③]

ねらい	・説明文を読み、理解したことを話す。 ・写真と一致する文をさがして書く。
具体的な手立て	説明文を読み、話し合いながら、写真と一致する段落をさがす。 体験を通して、文の内容を理解する
教材	「どちらが生たまごでしょう」

実践③では、写真に合う段落を教科書の本文中からさがす活動が行われた。両手にたまごをのせている写真と一致する文を探して、それぞれの児童が発表すると、グループ内で

意見が分かれた。そのため、意見が違う児童に何度も写真と文の説明をする姿が見られた。説明によって納得した児童は、写真と合う段落がどれであるかを理解することができた。また、学習中に、ゆでたまごと生たまごを実際に回してみることで、児童らは文章の意味を体験的に理解することができた。

4.2 日本語基礎指導

JSL 国語科指導に並行して、必要な児童には、特殊音の表記や助詞の用法等に意識を向け、書くための弁別的言語能力を高めることを目標とした指導を行った。

児童らが間違いやすい助詞を含む身近な内容の短文の音読や、短文の助詞のまちがいさがしをして、助詞の用法に意識を向けられるように工夫した。その他、特殊音の動作化や動詞の活用の表記を視覚化することで、書く技能の一部が身に付くことを心がけた。

5. 実践の経過と今後の課題

DLAの結果や指導中につかんだ児童の実態から、学習の様々な場面で個に応じた課題を設定することができた。そのため、児童の読む力・書く力の向上につながったと言える。

DLAは、児童らの具体的な言語能力のイメージを担当者間で共有するツールとなった。また、年間を通しての児童の日本語の伸びを把握することもできた。今後は、DLAの日本語能力判定の共通の尺度について現場で検討することが求められる。そして、学校と日本語指導機関双方の視点から、JSLカリキュラムづくりをさらに進めることが課題である。

【引用文献】

教育出版『ひろがる言葉小学国語3下』  
文部科学省初等中等教育局国際教育課(2014)  
『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA』